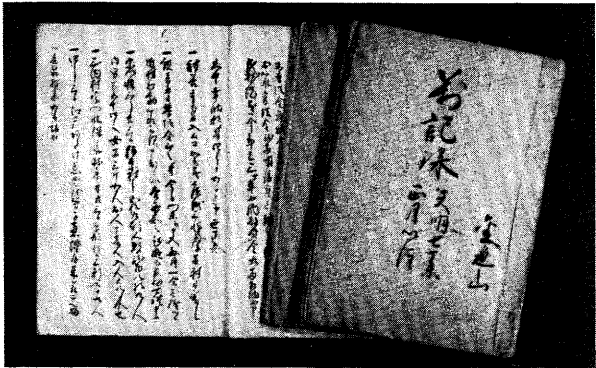


郷土あはれ

郷土館だより
第36号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069

江戸時代の寺の暮らし (その2) 大悲願寺日記より



左 慈明日記 右 宝明日記

1. 年中行事の裏表

大悲願寺には24世住職如環にょかんの資料が多く、弟子の養成、寺院経営に卓越した足跡をのこしたことが認められる。長く掲示されたことを示す茶色に変色した「年中定式記」は如環の筆になり、年間の行事と、その都度の末寺の本寺出仕規定が書かれている。如環の晩年、宝暦期(1750年代)の作成と推定される。鑢津ぼんしん、慈明じみょうとつづく時代は如環の敷いた路線の上をひたすら歩みつづけたものと思える。次頁に示した「年中行事表」は日記の記述を「年中定式記」を参照しながらまとめたものである。「定式記」には恒例の勸化かんげ(寄付)先とその金品まで規定してあり、暮の「釜注連」配りかまじゆめ(年神やカマド神へ奉る幣・扱はらいをセットにして檀家や信徒に配る)も羽村、福生、扇町屋(入間市)など広範の地区に配布日を指定している。

正月や盆暮の繁忙期に寺の行事の裏方を勤める者に、寺中百姓(寺内百姓)がいる。大悲願寺の場合は寺領の土地を無償で借りて住む6軒(のち5軒)の百姓である。村百姓との違いは村の労役(道普請や川普請)には出ないで、寺の労役に奉仕する。しかし冠婚葬祭や家普請な

どは村百姓と隔てなくつきあうから、寺に専属する特殊な人々ではない。自分の田畑も所有するが、寺の田畑の小作や、山林の管理も行う。寺で雇う年季奉公人(作方3名、勝手方1名)は一年ごとに入れ替わるが、寺中百姓は家族ぐるみ寺から離れないので、寺との関係は濃密にならざるを得ない。鑢津は寺中百姓の長である平助を信頼し、自分の死後のことは一切平助に委せてであると慈明に語っている。慈明がかつて横沢村の名主孫左衛門と仲違いし、孫左衛門より、今後は村の労役に出ない寺中百姓とは村人のつき合いを断わるという意地の悪い申出を受けたことがあった。慈明は怒って、如環以来の証拠文書を以て訴訟も辞さないと強硬に掛け合い、孫左衛門の申出を撤回させている。これなど慈明を評価してよい事例であろう。

天明7年の日記によると、4月8日の誕生会たうじ、4月17日の東照宮法楽の両日には「蚕守り」かいこまもを売出している。「蚕守り」は「定式記」には出ていない。当地方の養蚕が天明頃行なわれていた。あるいは盛んになりはじめた証拠となろう。暮れのお釜注連の場合は数が多いので日記によれば大悲願寺の住僧はもとより、近隣の竜性寺、法光院なども呼ばれている。作成したら配達である。「年

大悲願寺 年中行事表

<p>1月 年頭礼 元日から横徒、末寺衆年礼にみえる。返礼は6日以降、3ヶ日は寺中百姓夫婦で台所につめる。</p> <p>2月 年季奉公人の出替り（1年契約） 常菜会（2月15日）涅槃会ともいう釈加入滅の日。</p> <p>3月 桃の節句 小宴、召人隠居、横沢村名主、隣寺等。 正御影供（3月21日）弘法大師入定日、観音堂公開、参詣者多い。 宗門人別帳の作成 無住寺院、住職が留学中の末寺の押印もする。</p> <p>4月 夏講論義 50才以下の末寺僧侶を集めた勉強会 夏冬2回。 釈迦誕生会（4月8日）蚕守符頒布。 東照宮法楽会（4月17日）家康公命日。</p> <p>5月 端午の節句 召人桃の節句に同じ。</p>	<p>6月 暑中見舞 全末寺、有力檀家は見える。 贈物 そうめん、茄子、胡瓜、白瓜、ささげ、揚豆腐等、末寺は銭100文程度。</p> <p>7月 岩走神社例大祭（7月7日）大悲願寺住職の大般若転読を以て始まる。 大施餼鬼会（7月14日）檀中残らず集り法要後墓参。 盆供徴収（盆期間中）全檀家より米、金を集める。</p> <p>8月 十五夜</p> <p>9月 境内鎮守清滝宮神祭（9月19日）</p> <p>10月 冬講論義はじまる。</p> <p>11月 帯解 七五三の祝い。 小作米（金）の取り立 御影供（11月21日）3月21日とともに末寺貸付金の決算日。</p>	<p>12月 新蕎麦ふるまい 小作料徴収に伴う慰労日檀家惣代や世話人を招く。 寛鑲講（12月12日）新義真言宗の祖・興教大師入定の日。 煤払い（12月13日）寺中百姓動員。 餅つき（12月27日）同上。 寒見舞 暑中見舞の顔ぶれに概ね同じ贈物には干柿、梨、自然薯、炭、海苔、蜜柑、油揚など。 歳末御魂徴収 お盆の施餼鬼と同様、全檀徒より米や金が集められる。 お釜注連作製 地元檀家はもとより現在の秋川、福生、羽村さらに入間市域にも配布。作製には近隣末寺の僧まで動員。 大晦日の納豆配布 主要な檀家（20軒ばかり）に自家製の納豆を配る。</p>
---	---	---

中定式記」にはそこまでの本寺出仕は書かれていない。いずれにせよ、配りものの多いのは真言系寺院の特色であろう。

豊山の学僧歴の長い慈明は夏冬の報恩講（勉強会）に熱意を示した。これへの参加は50才未満の末寺僧の義務であり、同時に僧侶の修業履歴ともなった。着任早々天明5年11月11日、最初の冬講がはじまった。この最終日の20日には隠居鑿津の指示で、料理に酒がそえられた。これは慈明にとって前例にないことらしく、彼は日記に「心ならずも御隠居様の差図に任せ、これを出し候。とかく後例を恐れ候へども、^{よんどころ}抛なく末世の風に準じ候」と書き残している。ところが年歴を経るうちに慈明の報恩講の記事は簡単になり、時には参加者も少なく、1日で打ち切りの記載もあった。勉強ぎらいは当時の末寺僧も例外でなく、慈明も最初の意気込みは薄らぎ、いつしか「末世の風」に馴染んだように見うけられる。

最後に慈明の性格を示す今1つの事例を示そう。天明9年（寛政元）暮、福生の渡し守新七が、渡船を造り替えたので300文ほしいといってきた。渡船場への勸化は「定式記」にも書かれている。慈明は記録帳を調べ、新造船の際の前例に従い、200文を差出したが新七は頑なに300文を主張して譲らない。慈明はそれならば「古例を替えるだけの理由を示せ」といったところ、新七は200文を投

げ返し「申請けますまい」と帰ってしまった。慈明はその後、福生村名主に一書を認め、「当院人馬往来の節、渡船に障りあれば捨置きがたいので、あらかじめ此段届け置く」と申送っている。理づめの慈明と短気な船頭の出逢いが生んだユーモラスな衝突だが、たった百文でも筋が通らなければ譲れないとする慈明の性格と何事も前例を絶対視する時代相を浮彫りにした一件である。

2. 墓が示す村の序列

江戸中期の村の葬儀がどのようなものであったか、慈明の日記からまとめてみようとしたが、日記は当事者にわかり切ったことは書かないので、葬式の手順方法についてはハッキリしない。記載は布施がいくら、贈物が何、^{とき}斎飯が一汁何菜かといったことが殆どである。慈明はここでも彼らしい個性を発揮している。布施が慣例より少いと「今困窮の由」と納得したり、家によっては逆に「不見識なり」として遠慮なく注意している。また居士号を希望している場合も金額によって「一代限り差免ず」と記載している。これなど今のお寺さんでも行なわれているようであるが、近隣の名主家の葬儀には寺檀関係がないのに、略式供揃に見舞の品持参で出向く、これは江戸時代ならでのことであろう。今一つ葬儀で気付いたことは、寺が幕や諸道具を貸出していることで、寺が葬儀

屋を兼ねている。その為、お布施の他に「色幕代」が包まれる。檀払いの日、親戚等が寺に来てお礼をするが、その時の平均的相場は「布施」100疋（1分）～200疋、「色幕代」100疋～50疋（2朱）、贈物として衣料品1、2点である。この他に埋葬に際し、「野布施」として1貫文～500文程度が包まれる。以上は一般村人の例であるが、檀頭の場合は違ってくる。

文化13年正月、筆頭檀頭石川兵左衛門家の当主が亡くなった際の記録をみよう。住職宝明は伴僧に成就院を伴って出向き、同家にて所定の儀式をすませ、一足さきに立戻った。出棺は暮六つ時となり、寺では観音堂前に四方幕をめぐらして迎えた。石川家の墓地は境内北側山麓の一面を専用している。寺への謝礼はお布施1両、初七日分100疋、色幕代1両、贈物代1両、計3両1分と小袖綿入れ1つ、帯1筋とある。通例の3倍ちかい。当時の1両はどの程度の値うちのものか。大悲願寺の年季奉公人の給料が年1両2、3分で、並の百姓家なら10両前後で建つということで判断していただきたい。

いずれにせよ、檀頭は専用の墓所をもち、自分の墓の下に埋葬できるのに、一般村人は寺内の共同墓地に埋めさせられる。この差は大きい。一般の村人も詣り墓として自家の石塔をもっているが、それは檀頭の墓より一段と低く狭い場所に集められ、墓石が肩を接している。慈明の日記をみると、掘れば誰でも知れぬ骨の出る共同墓地を嫌い、ひそかに詣り墓の下に葬った例が出ている。慈明はさすがに掘り出せとは言っていないが、今後の為に始末書を取り再発を防いでいる。こうした非常の手段をとるのは檀頭家に次ぐ有力者であるが、多くの村人の願いも同様であったと思われる。しかし慈明は日記に、「自分の墓下に埋められるのは檀頭のみ」と明記し、伝統体制の擁護者であることを示している。こうした墓制によって村内上下のけじめがつき村の秩序が保たれると信じていたようである。

中世の寺を考えると、寺は創設者（開基）一族のものであり、墓もその一族と歴代住職の分があればこと足りた。あとは無縁者の投げ込み墓である。近世になって寺請制により、寺は地域住民のものとなったが、その住民間に階層格差があり、寺は村内序列の維持に一役買うことになった。大悲願寺の檀頭は村の支配層で固めており、中には中世以来の旧家もある。一方本寺としてピラミッドの頂点に立つ大悲願寺住職の階層意識も骨がらみになっており、古風な墓制が温存される条件はそろっていた。慈明の考えは時代の正統派であり、彼個人の旧弊さを責

めても意味はない。

「詣り墓（靈魂供養地）」と「埋め墓（遺骸埋葬地）」と別れている制度を「両墓制」というが、当地方では大悲願寺末の桧原村大沢の観音寺、西福寺末の大久野村細尾の光明寺がそうである。観音寺檀家の「埋め墓」は山中の共同墓地、光明寺檀家は自分の持山などに別々に埋めたという。「詣り墓」は寺であるが、観音寺檀家は自宅に設けた者もいたという。

大悲願寺のように、檀頭連は「単墓制」一般村民は「両墓制」というのはめずらしい。又「埋め墓」を人里離れた山中に設けるのは死の穢れを忌む原始的民俗信仰によるものだが、大悲願寺はなぜ寺内に共同墓地を置くのか、ここで思い出すのは大悲願寺文書にある「上村組頭九郎兵衛の覚書」で、九郎兵衛は先祖からの言い伝えとして昔（中世紀）大悲願寺の裏山をこえた「僧堂の入」（現在は「草堂の入」と書く）は伊奈、横沢両村の人々の共同墓地で阿弥陀堂があったと書き残している。この谷が本来の「埋め墓」であり、それが中世末か近世初頭に寺の境内に移されたときみれば納得がゆく。

後日談になるが、幕末になると一般村人の意識もすすみ、大悲願寺では墓制を改革しようという人々が墓所の新設をとえ出した。大悲願寺のように資産を持ち檀頭に頼らぬ寺は、一般檀家への気配りに欠けるものだが、時世の動きによって、寺側の意識も変ってきた。寺の境内は広いし、墓所を新設すればそれなりに寺の収入も益す。ところが檀頭側は不承知ということで、推進派は安政年間に訴訟を起した。檀家の大半が連署した出訴に驚いた檀頭連は反対を撤回したが、以後は消極的抵抗をつづけ、墓所の分割提供が始まったのは御一新後の明治3年であった。（大悲願寺文書参照）

3. 僧侶人生の明暗

27世宝明は義現房と名乗った修業僧時代から慈明のお気に入りであったらしい。彼が末寺第1位の大行寺（秋川市草花）の住職に転出したのは30代の若年であったと思われる。次いで大久野村西福寺に転ずるが、これは当地では大悲願寺に次ぐ地域の中本寺で、平井川流域を中心に相当数の末寺をもつ。大行寺といい西福寺といい40代、50代のベテラン僧侶が住職を勤め、そこで生涯を終える寺である。若い宝明の就任は異例であり、慈明の強力な人事力を感じさせる。西福寺は慈明の両親の菩提寺で、大久野出身の宝明にとっても居心地のよい寺と思われるが、彼は短期間のうち一転して江戸四箇寺（触頭寺）

の一つ^{みろくし}彌勤寺の住僧となった。どうやらここには慈明の親しい学僧仲間がいたらしい。慈明は宝明に学問修業の必要を感じ、彌勤寺に託したと判断される。大悲願寺所蔵の經典類が大量に彌勤寺に貸し出されたことが文化6年の日記にみえる。

宝明が慈明によって大悲願寺に呼びもどされたのは文化7年8月、時に宝明42才。慈明が入院した時と略々同年輩である。宝明の履歴をみると、大悲願寺住職を仕立てるため周到に仕組んだ慈明の意図が感じられる。

27世住職に就任した宝明は先師にならって日記をつけたが、簡略な筆致で慈明のように人柄をにじませた記述はない。大悲願寺には相変わらず末寺のトラブルが持込まれているが、宝明は世話人や仲介人を立て、自分が直接裁決することをさせている。「其意に任す」という言葉が日記の中にしきりに出る。敷かれたレールの上を用心深く、無難にこなす受身の姿勢が見受けられる。あくの強い慈明は自分と対照的にあくのない宝明を選んだ。

就任4年後の文化11年6月、川口村の末寺大仙寺住職亮環の失踪事件が起きた。彼は宝明より3才年下で、長く真照寺の住僧であった。かつては大悲願寺の法会などに出仕し、義現房の宝明と役を分けもった仲間である。寛政6年真照寺住職鳳環の没後その看守（檀家の推薦があったが、年歴不足か住職になっていない）となり、結局中年にして小さな末寺大仙寺住職に落着いた。彼の出奔は日記でみるかぎり突発の事件で、宝明は檀家の報告にもとづき、直ちに寺の什物調査を行い、朱印状、過去帳を本寺で預る一方、触頭寺と寺社奉行へ失踪の届を提出、人別帳にもその旨記載した。

亮環は時に43才。どういう心境であったか推測の限りでないが、中年僧侶の出奔には暗い行手が予見される。家族の支えのない孤独な中年男が意外にもろく崩れるのも理解されないではない。

慈明の時代、桧原地区の末寺の若年僧が豊山留学に出発、箱根付近で商売女に溺れ、旅費を蕩尽して立戻った一件があった。彼は一旦寺に籠もったが、慈明の呼出をうけるや出奔して行方不明となった。添状と道中手形と餞別まで貰った慈明の前には恐ろしくて出頭するどころではなかったものとみえる。しかし同じ出奔でもこの一件にはまだ明るさを感じられる。

当時僧侶になるには10才前後で寺に入り、^{とくと}得度（頭を剃って仏弟子となる式）をする。その後18、9才で新加（^{しんか}修業僧の仲間に入る式）を行う。得度の頃は親の意志が優先し、本人の自覚度もおぼろであろうが、新加の頃は自

我や性の目覚めによる悩みが深刻な筈である。生涯独身を強制される僧侶生活はその不自然さを克服する強い意志とともに何らかの代償行為、例えば信仰、勉学、或いは趣味への没入を必要としよう。慈明も宝明もその点模範生らしいが、将来への期待・自負が彼らを支えた面もあったと思われる。

天明8年3月平井村千石より慈明縁故の9才になる男子が弟子入りした。慈明は千全と名付けて可愛がり、祭や村芝居の見物にも出している。寛政6年11月には初護摩修業を自ずから指導し、千全の親許から祝儀の届いた記事がある。ところが寛政7年12月、17才の千全は慈明を嫌って出奔し、八王子四谷の西蓮寺に逃げ込んだ。間に円福寺の住職が入り、千全の身柄をしばらく西蓮寺へ預けることを慈明にすすめている。慈明は「千全儀、何れなりとも勝手次第」と答えているが、愛するものに背かれた苦々しさがにじみ出る筆つきであった。筆者は思わず衆道関係を連想したが、これは資料に対する勝手読みで、歴史の枠をこえ、文学の次元へ踏み込んだものと非難されても仕方ない。ただ長大な大悲願寺日記の中で、こうした想像が誘発される唯一の箇所でもある。

話を宝明にもどすと、宝明も文化13年正月、新加の披露を終えた許りの光同という若者を「不埒の義、これ有り候に付、^{いとま}暇さし遣わす」と寺から追放している。光同も小坊主の時から大悲願寺育ちで、宝明のよき手足ともなり得る立場だったが、宝明は前々より手こずっていたようである。この頃の大悲願寺は全く無人となり、法事や葬儀にはその都度近隣末寺の僧を頼む始末であった。その上同年8月頃より宝明は体調を崩し、日記の記載も「格別記事これなき間、これを略す」と省略し、12月の終行に「無人故、病気に付、人頼み候」とある。この人は院代（住職代理）であった。翌文化14年の日記は僅か15行で、正月22日の記事を最後としている。これは大悲願寺と並ぶ真言宗の地域本寺大幡（^{おおはた}八王子市西寺方町）の宝生寺の住職が新任の挨拶に見えた記事で、「供廻り都合15人にて来る」として、その日の饗応、持参の祝儀品が書きとめられている。晴れて乗り込んできた得意の客人の記事を以て、宝明は筆を擱いた。

彼は同年5月28日入寂している。享年49才。犀利な洞察力をもつ慈明も、愛弟子宝明の早世までは見透せなかった。師弟相承の輪もここに断たれ、同時に大悲願寺日記も書き手を失った。